

「北寿老仙をいたむ」私論

——雉子の役割を中心に——

清 登 典 子^{*1)}

An Essay on the Requiem for *Hokuju Rousen*

——Especially on the roles of a pheasant——

Noriko KIYOTO

ABSTRACT

The Requiem for *Hokuju Rousen* is a free verse poem by Yosa Buson, a famous painter and haiku poet of the Edo period, is a favorite of many. There have been various interpretations of this poem, but none have been accepted as the standard interpretation. In this paper, I focus on the roles of a pheasant in this verse and examine the former interpretations about the pheasant. Based on these I suggest as a likely interpretation that Buson identified himself with the wandering pheasant which had lost his friend. From this point of view, this is, the integration of the pheasant and the poet, I attempt a new interpretation of this verse.

はじめに

「北寿老仙をいたむ」は延享2年(1745)、蕪村30歳の折に亡くなった、早見晋我(北寿老仙)の死を悼んで作られた自由体の詩である。そして、蕪村の作品の中でも特にその浪慢性、青春性のゆえに愛好されてきている作品である。しかし、肝心のこの詩の解釈をめぐっては、諸説入り乱れていまだに定説を得ず、さらに成立年次についても謎を残したままという、問題の多い作品でもある。

本稿においては、これらの問題点のうちから、特にこの詩の解釈における雉子の役割の問題を取り上げてささやかな検討を加え、この詩の意味について考えてみたいと思う。

*1) 放送大学助教授(人間の探究)

北寿老仙をいたむ

- 1 君あしたに去ぬゆふべのころ千々に
- 2 何ぞはるかなる
- 3 君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ
- 4 をかのべ何ぞかくかなしき
- 5 蒲公の黄に薺のしろう咲たる
- 6 見る人ぞなき
- 7 雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば
- 8 友ありき河をへだてゝ住にき
- 9 へげのけぶりのはと打ちれば西吹風の

-
- 10 はげしくて小竹原真すげはら
 - 11 のがるべきかたぞなき
 - 12 友ありき河をへだてゝ住にきけふは
 - 13 ほろゝともなかなぬ
 - 14 君あしたに去ぬゆふべのころ千々に
 - 15 何ぞはるかなる
 - 16 我庵のあみだ仏ともし火もものせず
 - 17 花もまいらせずすごくとイめる今宵は
 - 18 ことにたうとき
 - 19

I.

最初に、後の叙述の便のため「北寿老仙をいたむ」の全文を『いそのはな』所収の形のまま掲げることにする。(尚、それぞれの行には私に番号を付した。)

さて、これまでの解釈でもっとも説の分かれるのが、7～13の部分である。これを雉子の役割という観点で整理してみると、大きく分けて甲、乙二つの説にまとめることができる。以下それぞれの説の立場について簡単に押さえておく。

[甲説]

この説では、7の「鳴を聞ば」を「鳴くのを聞くと以下のように言っているのである」と解して8～13までをカギカッコでくくって雉子の台詞と解する。従って、8の「友」は雉子の友(すなわちもう一羽の雉子)となり、雉子自らが友の雉子を亡くした悲しみを述べ、それを聞いた作者の悲哀を深くするという重要な役割を担う存在となる。

この説は、中村草田男氏¹⁾、麻生磯次氏²⁾の解を受けて、近年に至り、村松友次氏³⁾により鮮明に打ち出されたものであり、尾形 伋氏⁴⁾によっても支持されている比較的新しい説である。今、この説に基づく解釈を村松氏の現代語訳⁵⁾によって示すと以下になる。

おや！雉がいるのでしょうか。いたましい声で、ひた鳴きに鳴いています。聞くとこう言っているのです。「親しい友があった。河をへだてて、共にこの岸に住んでいた。あやしい煙がぱっと散ったかを見ると、たちまち西から風がはげしく吹き(友の命の緒はたちまち吹き弱り)小笹原も真すげ原も吹き乱れて、のがれかくれる所もなかった！……親しい友があった。河をへだてて、共にこの岸に住んでいた。だが、もう今日は、ほろろとただの一声も鳴かない。」と。

しかし、この説に対しては甲説の側から「悲歌全連の流れのなかで雉子の擬人化が度をこえて強くなりすぎる」(芳賀 徹氏『与謝蕪村の小さな世界』)との批判も寄せられている。

[乙説]

この説においては、7で雉子の声を聞きながら8以下は作者の思いを述べたものと解する。したがって8の「友」は作者の友、北寿老仙のこととなる。この立場に立つのは、清水孝之氏⁶⁾をはじめ山本健吉氏⁷⁾、芳賀 徹氏⁸⁾など多数を占める。その代表的な解釈として清水氏の訳を示しておく。

どこに雉子がひそんでいたのでしょうか。ひたすら悲しげに鳴き続けるのを聞いていますと、親を呼ぶ鳴き声のようにも思われます。でも私には親とも頼んだあなたを親しくお呼びすることもかないません。思えば、今朝までは得がたい老友がその河向うに住んでいらっしやいましたのに。どうにも哀傷に耐えがたく、私はまた人里のほうへ帰って参りました。お宅のあたりで、この世ならぬ薄紫の煙がぱっと散ります。するとそれは折からの烈しい西風にあおられて、たちまち夕暮の空へと消えてしまいました。

た。小竹原や真菅原のどこにもこもりようもありません。人間の一生など、まことにそのようにはかない夢幻かもしれません。またもや思い出深い岡のべにやってまいりました。そうしてあなたという得難い老友が、ついこの間まで河をへだてて住んでいらっしやったのに、と追憶にふけることです。しかし今日はあの雉子はほろろとすら鳴きません。

しかし、この説では 12, 13 行目の途中で主語が変わる不自然さがあり、さらに詩の中で、何日かにまたがる出来事が詠まれているとすることから来る、場面と時点の頻繁な移動などの問題点が指摘できる。

以上、従来の解釈を甲乙ふたつに分けて概観してみたが、どちらの解にしても、問題点が残る、すっきりと割り切れない面があると言えるだろう。

II.

ここで、改めて考えてみたいことがある。それは、この詩において雉子（あるいは鳥）を登場させる必然性がどこにあったのか、という問題である。もしこの詩に雉子（鳥）を登場させず、「君あしたに去ぬ」で始まる作者自身の追悼の思いを一貫して表現したとすればどうだったであろうか。前節にみたような解釈上の混乱を招くこともなく、よりわかりやすい作品となっていたのではないだろうか。それを敢えて作者以外の登場物をもってきたのはなぜなのか。また、それは必ず雉子（鳥）でなければならなかったのかどうか。あるいは雉子（鳥）が選ばれたのは単なる偶然に過ぎなかったのか。

結論から先に言えば、私は「北寿老仙をいたむ」に、作者の悲しみを深める存在として雉子（鳥）が登場することには大きな意味と必然性があったものと考えている。それは、他の人物や動物では代替不可能であったと思う。

というのも、北寿老仙の亡くなった頃、すなわち関東遊歴時代の蕪村にとっては友を失い、一羽さまよう鳥の姿ほど自己を重ねるのにふさわしい存在はなかったと思われるからである。

たとえば、宝暦 4 年に出された『夜半亭発句帖』の蕪村跋文には、蕪村が俳諧の師であった宋阿を寛保 2 年 6 月に失ってのち江戸を去り、結城・下館を中心とする関東遊歴時代に入る時期のことが回想されているが、その中に次の一文があり、注意をひく。

阿師没する後、しばらくかの空室に坐し遺稿を探りて、一羽鳥といふ文作らんとせしも、いたづらにして歴行する事十年

ここから師、宋阿の没した直後に蕪村が遺稿集を編もうとして果たせなかったこと、その書名として「一羽鳥」を考えていたことがわかるが、この「一羽鳥」なる書名には、世の流れに超然としていた師、宋阿の姿が託されているとともに、一人残された蕪村自身の孤独な姿も重ねられていたことだろう。特に宋阿没時の蕪村の俳号が「宰鳥」であったことも思い合わせるならば、この「一羽鳥」という題号に込めた思いには、深いものがあつたと推測される。

尚、この「一羽鳥」のイメージとの関連で注目したいのが、安永 9 年の几董宛蕪村書簡である（集英社『蕪村集全』書簡番号 36、以下の引用も同書による）。

この書簡は、安永9年に刊行された『もゝすもゝ』に収まる「牡丹散て打かさなりぬ二三片」を発句とする歌仙中の几董の句「博士ひそみて時を占ふ」に対して蕪村が自分の付句の案を知らせたものである。付句の案として書かれているのは全部で4句だが、その中に

はしぶとの友うしなへる聲かれて

なる句が見えるのである。この句は、友を失った「はしぶと鳥」が声を洩らして鳴いているさまを詠んだものであり、これはそのまま先の「一羽鳥」の題号のイメージとつながるものと捉えられるだろう。そして、それは「北寿老仙をいたむ」に登場する雉子の姿とも重なるものと言えるのではないだろうか。

(ちなみに、この書簡には他にも「栗負へる馬たふれしと鳥啼て」の句案が示されており、これは孔子の門人で「公治長」という、鳥語を解する人物の故事を踏まえての句作であることを蕪村自身が述べているが、鳥の鳴き声の内容を人間が知ることができる、という点、「北寿老仙をいたむ」の解釈を考える上で見逃せないものがある。)

さらに関東遊歴時代の蕪村と鳥のイメージに戻って述べるなら、この時期の発句作品にも注目すべきものがある。たとえば、北寿老仙(早見晋我)の死の前年に、蕪村は「宰鳥」から「蕪村」に改号したが、その蕪村号で初めて発表された発句は

古庭に鶯啼きぬ日もすがら

という倦怠の気の漂う、やはり一羽の鳥を詠んだ句であった。また、関東遊歴を切り上げて、宝暦元年に上京した直後の蕪村が、晋我の息子、二世晋我(桃彦)に宛てて報じたと推定される書簡(書簡番号333)に記されたのが

おし鳥に美をつくしてや冬木立

という鳥の句であったことにも、単なる偶然とばかりは言えないものが感じられる。

このように見てくると、この期の蕪村が孤独な鳥としての自己のイメージを持っていた可能性は高かったと思われ、少なくともそのような鳥の姿に心惹かれ、心寄せていたことは確実であると思われる。

そして「北寿老仙をいたむ」において、他の鳥ではなく、特に雉子が選ばれたのは、雉子が伝統的に情の深い鳥として、詩歌に詠まれる存在だったからと考えられる。

ただし雉子は、親子・夫婦の心のきずなと結びつけて詠まれるのが普通で、友との別れと結び付けられることは一般的という訳ではない。しかし師の宋阿を失って、青年期特有の孤立感、疎外感に悩んでいた蕪村にとって、暖かな理解者のひとりであった晋我(北寿老仙)を失った悲しみは大きく、それは肉親の死の悲しみに匹敵するものと感じられたのではないだろうか。

また、友の死を悼む作品に雉子を登場させる例が全くないわけでもなく、例えば仙台の俳人雪門の三回忌追善集『封の儘』(安永7年刊)に収まる「声ふりて」歌仙(蕪村も付句を寄せている)の巻頭発句として「声ふりて聞ゆ雉子の樹神にも」という仙台の吾友の句が見出せる。

もちろん実際に結城、下館地方に雉子が多く生息し、その鳴き声の哀切さに心を惹かれる経験のあったことも雉子を登場させた理由の一つであっただろう。

III.

前節での検討を通じて、「北寿老仙をいたむ」における雉子（鳥）の登場が、蕪村自身の内的必然性に基づくものであり、友を失ってさまよう鳥の姿こそ青年期の蕪村が抱いた自分自身のイメージそのものであった可能性の高いことを指摘した。

こうして蕪村が鳥の姿に自己を投影する、あるいは自身を一羽のさまよう鳥として捉える傾向にあったと仮定してみるならば、「北寿老仙をいたむ」の雉子をめぐる解釈も、これまでとは違った見方ができるように思う。

それは雉子の鳴き声に作者の心の投影を見て、雉子と作者をより一体化した存在として捉える、という見方である。これは、雉子を作者の悲しみに色を添えるための舞台装置の1つとして見る立場とも異なり、また、主人公と雉子との関係に、ドラマにおける役割分担を見て作品全体が一つの劇としての構成を持つ、と考える立場とも相違する。

私は、この作品は構成への顧慮よりは感情の真実の流露に重きが置かれ、作者と雉子とは一体化した未分化の存在となっていると考える。むしろ構成という面でいえば後の「春風馬堤曲」の方がずっと完璧であり、「北寿老仙をいたむ」は表現上の破綻をさえ見せていると思う。

具体的に述べていく。まず7「雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば」は、甲説の通り「雉子がいるのだろうか、ひたすらに鳴くその声を聞いていると（こう言っている）」という意味であり雉子の登場を示していると考ええる。しかし、この時、雉子の姿は見えず、作者はただその哀切な鳴き声に耳を澄ませているだけであることを注意したい。

次の8「友ありき河をへだてゝ住にき」から11「のがるべきかたぞなき」までは、友を失った悲しみを訴え、運命の逃れ難さを嘆くという、雉子の声の内容である。が、それはあくまでも作者の側が雉子の声として聞き取ったものであり、実は作者自身の心の声でもある¹⁰。雉子の悲しみの声を聞くうちに、作者の心は雉子に寄り添い、雉子の声は作者の心の声と重なり、両者は分かちがたくなっていく。

やがて作者の心は雉子と一体化し、その感情の高まりが12、13の「友ありき河をへだてゝ住にきけふは／ほろゝともなかぬ」の表現へと結実する。この二聯こそ「北寿老仙をいたむ」全体を通じての表現上のピークであり、同時にこの詩の理解に混乱を引き起こす中心ともなっていると考えられる。

これまでの解においては、普通「ほろゝともなかぬ」のは、すでに7で登場している雉子（乙説）、または7で登場した雉子とその死を嘆いている友の雉子（甲説）、そのどちらかの雉子と取られてきている。「ほろゝ」というのが雉子の鳴き声であるから、それは当然であろう。しかし、私はこれを作者蕪村が、雉子の声に重ねて発した心の叫びと捉えた。つまり、「けふは／ほろゝともなかぬ」とは、北寿老仙（早見晋我）が、もはやこの世にはいないこと、その声を聞くこともかなわぬ存在となったことを表現したものと取りたいのである¹¹。

しかも、それは北寿老仙を雉子に譬えた、というような表現のレベルでなされたのではない。そうではなく、作者の心が友を亡くした雉子と一体化した結果もたらされた表現主

体の混乱であり、雉子の嘆きに重ねられた悲しみの痛切さが、論理的な整合性を超えて達成した、やむにやまれぬ哀悼の表現と見るべきだと考える。

「友ありき河をへだてゝ住にき」のフレーズが二度繰り返されるのも、一度目は作者の心に響いた雉子の嘆きの言葉であったものが、二度目にはその雉子の心と一体化した作者自身が「私にも友があった。やはり河をへだてて住んでいた。しかし、その友は今日はほろろとも鳴かない存在となってしまった」という心の叫びを、雉子の悲しみの声に重ねて、自然に発してしまったものと捉えたい。

しかも作者自身、このような心の動きを読者に理解しやすい形で提示する余裕はなく、むしろ感情の流露に任せて一篇の詩が成ったために、それが結果として、この作品を難解で、割り切れぬものとしたのではないだろうか。

「北寿老仙をいたむ」の雉子の解釈が諸説に分かれてしまうのも、実はこの詩における作者と雉子との関係が未分化のままに表現されている点にその原因があると考えられる。

結 び

ある意味では「北寿老仙をいたむ」は、表現的には未熟な面を持つ作品と言える。しかし、そのような欠陥を有しながらも、雉子の嘆きが青年蕪村の嘆きと混然となって迫る時、必ずしも全てを理解できなくとも、ある種の痛ましさ、魂の真実というものが読者を直接に打つのも事実である。

蕪村は終生自己を語らず、絵画と俳諧という二つの世界に、美の別天地を求めて韜晦したが、「北寿老仙をいたむ」では他の作品では見せない剥き出しの心を覗かせている。それは、何と痛々しく、無防備な悲しみに満ちたものであったことだろうか。

この詩の成立年代について、安永6年（蕪村62歳）春に出た「春風馬堤曲」との語句や素材の類似、あるいは他の登場人物に思いを代弁させるという手法の共通性をもって、同じ安永期の作ではないかとの説¹²⁾も提出されている。しかし、本稿で見てきたような、関東遊歴時代の蕪村の精神状態とこの詩との深い結び付きなどを考えると、やはり「北寿老仙をいたむ」は、晋我の没後あまり時を経ぬ時期に（少なくとも関東遊歴の期間中に）書かれたのではないかと思われてならない。この詩の見せる無防備な悲しみもまた、この詩が若さの持つ痛みの中で書かれたことを証してくれているのではないだろうか。

注

- 1) 現代訳日本古典『蕪村集』（昭和18年10月、小学館）
- 2) 「蕪村評釈（一）」（『国文学解釈と鑑賞』昭和23年1月、至文堂）
- 3) 「『北寿老仙をいたむ』の解釈ほか」（『俳文芸』7号、昭和51年6月）
- 4) 『蕪村俳句集』（平成元年3月、岩波書店）
- 5) 鑑賞日本の古典『蕪村集』（昭和56年7月、尚学図書）
- 6) 新潮日本古典集成『興謝蕪村集』（昭和54年11月、新潮社）ほか多数
- 7) 『興謝蕪村』（昭和62年5月、講談社）
- 8) 『興謝蕪村の小さな世界』（昭和61年4月、中央公論社）

- 9) 注 6 に同じ
- 10) 山下一海氏もすでに『戯遊の俳人 与謝蕪村』(昭和 61 年 2 月, 新典社)において 8 行目の表現につき「8 のところはおそらく雉子の言葉であろう。しかしそれがいつのまにか曖昧になって、雉子の言葉とも作者の嘆きともつかないものになってしまう」という解釈を提示されている。
- 11) 12, 13 についての同様の解釈が、安東次男氏によって『与謝蕪村』(昭和 45 年 8 月, 筑摩書房)に示されている。ただし安東氏は、これを作者の心が雉子の心と一体化した結果の表現とは取らず、この表現が「たぶん、この詩で最も工夫のこらされたところである」とし、この表現を引出すために「雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば」が「充分な計算の上に扱われている」と見る。
- 12) 注 4, 注 5 など。

(平成元年 12 月 22 日受理)